

執筆：ももえもじ

全員お嫁さん

女子水泳部編



あらすじ

汐晴しおばれ女学園の教師を務める墨田すみだちかい誓は、フアンクラブが作られる程に人気だった。

若い上に容姿も整っており、なにより勤め先が女学園ときている。恋愛に疎い女子にとって刺激の強い存在なのも当然だろう。周囲は常に黄色い声で溢れ返り、廊下を歩けば、まるで吸い寄せられるように輪が描かれていた。

自身が担う水泳部からは特に慕われており、学園では勿論のこと、私生活でも仲が良いと有名だった。

ふたを開けてみると、水泳部では完全なる主従関係が築かれていた。

水泳部以外は立ち入り禁止の屋内プールにて、女子部員が顧問の誓を崇拜する。誓がプールに現れると、それまで懸命に部活へと勤しんでいた女子達が一変……誓へと集まり、蕩けた瞳で犬のように遜る姿があった。

水泳部以外は立ち寄れないプールに響き渡る女子達の鳴き声。身も心も誓へと捧げており、今日もまた、スクール水着を白濁に染めて貰いたく列を成していた。



豊島 美波（とよしま みなみ）

三年生。水泳部の部長。
成績優秀、スポーツ万能、家柄も良く、
絵に描いたような完璧なお嬢様。
隠れ巨乳であり、その大きさにコンプレックスを抱いていた。

お嬢様が集まる夕晴の中でも、特に目立つ存在であり、
同性からも人気がある。
ある事件を切っ掛けに、誓の性奴隷を誓っている。
初めこそ抵抗はあったものの、
次第に性奴隷としての宿命を受け入れていき、
いまでは立派な性・依存症と化している。
ただ、表面上は部長らしく規律を重んじている。

◆好きなプレイ
水着越しに秘部の臭いを嗅がれること。
誓の局部の臭いを嗅ぐこと。
実は比類なきM気質。
誓に命令されるだけで興奮する。



中野 涼夏 （なかの りょうか）

二年生。水泳部員。
元気が取り柄な女の子。
運動神経が非常に良く、二年生ながら
水泳部のエースを務めている。

根っからの体育会系であり、上級生には従うものの、
一年生に対しては高圧的な部分がある。
誓の性奴隷であり、身も心も捧げている。
また、涼夏は入部当初から誓に恋していたと言い、
性奴隷としての役目も、自分こそと信じて止まない。
将来の夢は、誓のお嫁さん。

◆好きなプレイ

性感帯を強く噛まれること。
誓に強く依存しており、誓に尽くすことが一番の幸せ。
ハグ・キスといった愛を認める行為が好き。



足立 渚 (あだち なぎさ)

一年生。水泳部員。
箱庭育ちの無垢な女子。
いままで異性と関わったことが一切無かった為に、
教師が相手でも、男であればオドオドしてしまう。

二年生、三年生の部員が皆して誓の性奴隷であり、
一年生もその事実を受け入れていく中で、自分だけが
取り残される。

輪に加われず、出来ることと言えば、自慰行為だけ。
快楽には貪欲らしい。
いわゆる、むつつりスケベ

◆好きなプレイ
オナニー

目次

7 一 慕 う 女

第一話 慕う女

一 汐晴女学園

「ふう」

ひと気の無い駐車場に、一筋の煙が薄く昇る。有害だと注意され続けてもなお吸い続ける理由を模索しながら、俺は今日も煙を肺へと送り込んでいく。視線の先に映える女学生を肴に、一本、また一本と煙草が消費されていた。

「これが堪らないんだよな」

時は既に放課後である。夕陽が差し込み、間もなく夜の帳が降りる頃だ。

本来なら水泳部の顧問を全うして、すぐにでもプール場へと顔を出さなければならぬだろうが、最近は授業が終わっても部活に顔を出さず、こうして暫く目の保養に努めていた。

グラウンドではソフトボール部、サッカー部、陸上部が精を出している。その向こうには、テニス部の姿も辛うじて見ることが出来る。彼女達の汗を掻く姿を眺めながら煙草を吸う……これが堪らなく好きなのだ。

「先生また煙草吸ってる！！ 辞めた方が良いって言ってるのにい！！」

「臭いもキツいし。そんなんじや、水泳部から嫌われちゃうよ？」

「横から急になんなんだよ。大人の自由だろ。いいから帰れよ」

「はあーい、じゃーね、先生」

「誓せんせ、さよなら」

自転車を押しながら眼前を通り過ぎる女子達と下らない会話をする……これも日課の一つだろう。そっけなく応えながらも、内心では俺を見つける度に慕って話し掛けてくれる様子に歓喜を覚える。歓喜しながら、汐晴女学園に通う女子のレベルの高さに感嘆していた。

適当に指差した女の子、どれもが可愛いらしい。アイドルのような完成された美少女が居れば、哀れな程に無垢で幼らしい女子も多く存在する。汐晴女学園においては後者が圧倒的に多く、要は俺に危険な劣情を齎す場所だった。

「この光景を見られる者、見られない者、それだけで人生が公平性に欠いてる」

女子の可愛さは勿論のこと、汐晴女学園の特徴はそれだけに非ず。

ソフトボール部は専用のユニフォームに身を包んでおり、それはそれでグツと来るものがある。けれど、特筆すべきは陸上部やサッカー部である。古き良きを採用しているのか、汐晴女学園の体育着が未だにブルマーなのだ。

既に公の世界からは抹消されたとされる、あの幻のブルマーである。外界からシャットアウトされた、正に箱庭のような汐晴女学園ならではのと言える。ここに着任した当初は、感動のあまり涙した記憶もあった。

「……局部だけ隠せば良いと思ってるのか？ そんな訳ないだろうに……」
付け根から太腿を全開に露出しながら、グラウンドを駆け回る陸上部の光景は、如何なるポルノ映像よりも価値が高いと確信する。あれをエロとしていないからエロいのだ。

また、夏を過ぎたとはいえ、まだまだ日差しの強さは健在である。この暑さで走れば汗だくは必至。上着は汗ばみ、乳房の形が淫靡に浮き出ている。下半身も、蒸れてうっすらと割れ目が見えそうな勢いだった。

「すげえ良い匂いするんだろうな」

叶うなら、あの汗だくの体育着を貰いたい。汗でびしょ濡れの服に鼻を埋めて臭いを堪能したい……そんな想いが駆け巡って止まない。妄想を繰り返しながら、また煙草が消費されていった。

「ふう」

灰皿を見ると、もう十本近くの吸い殻があった。
それだけ部活動を遠巻きに眺めていたのだ。

普通なら、あまりの不審者に逮捕モノである。女学園の教師だからこそ許され、その自由を享受する気持ちも必然とは言えるものの、ちよつと時間を食い過ぎた気がしないでも無く、少しばかりの罪悪感を覚えた。

「俺は、いつからこんな人間になっちまったんだろうな」

汐晴女学園に着任して早くも二年が経っている。少なくとも、最初の一年目は真面目だったハズだ。真面目というか堅物だった。

妻子が居たこともあつて、女学生に欲情するなんて有り得なかった。

「ヤバいな、パンツ濡れてるわ」

それが現在はこの始末である。擦れ違う女子との会話や、部活動に一生懸命な姿を眺めてただけで下半身に異常を来している。下着の中は既に熱く滾った物が暴れようと猛り、先端から漏れる怒りの発汗が周囲を濡らしていた。

こうなったら、もうやることは一つである。

「部活に行くか……」

煙草を吸いながら女子と触れ合い、そして運動やらのエロさを痛感する。熱が高まつてきた所で漸くと水泳部に赴く……これぞお決まりだった。

二 水泳部の実態

汐晴女学園のプールは屋内にある。学舎から少し離れた場所であり、基本的に水泳部が独占している。一般学生は立ち入り禁止な程だった。

そんな環境も手伝って現在に至ったのだろう。率直に述べると、俺は水泳部の二年生、三年生の全員と肉体関係にあった。

学園内で噂されている通り、俺は常日頃から更衣室や部室、或いはプール内で行為に馳せている。また、それだけに飽き足らず、私生活においても部員を俺のアパート部屋に呼びつけては、一日中エッチに浸かったりもザラだった。

三年生は八人、二年生は十二人が在籍する。よって計二十人の女と肉体関係に及んでいる。一人ひとり順番に呼んでまぐわうこともあれば、更衣室等で全員をスク水のまま奉仕を命じたり……それでいて普段は何の気なしに教鞭を振るっているのだから、やはり俺は、何処か変になっているのかもしれない。二十人とはとんでもない人数なのに、去年に比べたら物足りないと感じるくらいなのだから。

去年は三年生が十七人も居たから、合わせて三十七人も女が居た。

それらが卒業して現在は六人の一年生が新たに在籍している。

「相変わらず全員可愛いんだけど、今年の一年生は特にウブだからな……」

例により新入部員も可愛い子ばかりだった。

大人っぽい子が集まりやすい汐晴女学園にて今年の一年生は珍しくロリっぽい学生が多かった。水泳部に入った六人は、まさかの全員が童顔&細身の低身長と来ている。ぶっちゃけると、ストレートに俺のタイプだった。

けど、如何せんシモに弱い。普段は大人しくて可愛らしいのに、場が少しでも変なムードになると、途端に真っ赤になって慌てだす。逃げようとするのだ。

俺と二年の水泳部が更衣室でセックスしてた所が見つかった時は大変だった。

顔がトマトみたいに真っ赤に染まり、状況を説明しても中々受け入れて貰えず。

まあ、この学園に通う女子は大体が箱庭育ちだから、寧ろこれくらいウブな方が正常なのかもしれない。現在の二、三年生や、去年の卒業生が異常だったのだ。

「無理をする必要は無いな」

それよりも、いまをなんとかしなければ。時代遅れのブルマー姿で高めた次は、当然スクール水着で処理してもらおう他はない。急ぎ足で屋内プール場に辿り着く。更衣室に人の気配を感じると、俺はノックもせずドアを開けた。



「ひやあああああつ!!」

「せ、先生っ!!」

当然ながら、更衣室とは女子更衣室である。屋内プールの更衣室なので女子も水泳部に限っている。中に居た子は、顔馴染みの水泳部だった。

二人おり、どちらも二年生だ。長髪の方が日登江^{ひとえ}、無乳&丸髪を三沙^{みさ}という。俺の乱入に驚くというよりも、呆れた顔でむくれていた。

「もお、また勝手に入ってきてっ!!　せめてノックして下さいっ!!」

「もうとつくに部活は始まつてる時間だ。大会も近いのに遅刻する方が悪い」

「委員会があつたんですっ。これでも学生会ですから。女の子眺めながら煙草を吸ってた先生とは違うんですよっ!!」

「な、なんでそれを」

「ふんっ。それより早く閉めて下さい。誰かに見られたら、どうするんですか」

「そうだな。中に居たのも、お前らで良かったよ。一年だったら面倒だからな」

「そう思うならノックして下さい……」

と言ひ、げんなりする女子達。まるで常識人のように俺を責め立てているけど、それは飽くまでも建前に他ならない。それを証拠に、俺がプールではなく、直に更衣室へと現れた理由を二人は重々に分かつていた。

水泳部の更衣室というだけあり、湿気の溜まった酸っぱい臭いが広がっている。その中に立ち込める微かな女臭が俺の鼻を擽る。俺は、この水泳部独特の臭いが好きだった。

女子の着替え中でも構わず、俺は壁際に寄せて置かれたベンチへと腰を下ろす。女子が二人して目を配り合う。なんの示し合いかは、別に問わなくても分かっている。予想通り、女子達は少し照れたような表情を浮かべながら、俺を挟むように両隣に座ってきた。

スクール水着で座り、わざとらしく俺に体重を乗せてくる。既に眼光は官能に染まっているように見える。だが、俺の懷に顔を埋めるなり、すぐしかめっ面に変わった。

「せんせ、煙草臭い……」

「うう、服に染み込んでますよ、臭いのが……」

「大したことないだろ」

「大したことあります。なんでこんなに臭いんですかあ……」

十本くらい吸ってきたからな。だからって、そんな臭うようには思えないが。

嫌々言いながらも、二人に離れる様子は無い。二人して俺の腕に絡み付き、その蠱惑的な胸を味わわせてくれる。

「お前らが勝手に寄ってきたんだろう」

「せ、先生が来て欲しそうな顔してたからでしょっ」

「そんな顔してない」

「じゃあ、これはなんなんですかっ」

不意に、日登江の軟らしい纖手が俺の膨らみを捉える。先程から高まっていた股間の山なりである。ズボンの丸みに触れた日登江が小さくも意味ありな吐息を漏らす。とうに顔は雌に染まり、感化された三沙も同じように俺の股間へと手を伸ばした。

「……ッ!？」

的確に先端を捉えた二手に、思わず声を漏らしそうになる。別に声を漏らした所で構わないのだが、ちっぽけな男のプライドで堪えてしまうのだ。

日登江、三沙の二人とも、この一年間で結構な回数を熟してきた。

けど、それでも他の部員と比べたら、かなり少ない方なのだ。

本命じゃない女に感じさせられるのが少し恥ずかしいのである。もしかしたら中々無い感情かもしれない。だが、二人とも上手い。日に日に男を悦ばせる力が高まっている。あろうことか二人は手淫を交わしながら、俺の腕へと水着越しに乳房を宛がい、そして両耳を舐めてくる。

「うぐゆっ!? い、いきなり来たな……」

「せんせ、我慢し過ぎて変な声出てるよ……」

「両耳を同時に舐められるって、どんな感じなんだろう。こんなに震えちゃってさ。私達の声しか聴こえない? そうだよ、両方からゼロ距離で話してるもんね♥この瞬間だけ、先生は私達で頭いっぱいになってくれてるんだよね……♥」

「う、あああつ、ぐゆゆっ……」

「先生、こういう時だけ可愛い反則だよ……」

「お、お前ら、ずっと耳元から離れないで喋りやがって……」

「私達も勉強したんですよ? 先生に悦んで貰う方法を……」

全身に快楽の波が押し寄せる。これには流石に身体が快楽の反射を見せた。

耳元で囁かれる。俺が耳責めに弱いことは周知の事実だ。

だから、水泳部の女達は積極的に俺の耳を攻撃している。温かい吐息が鼓膜を叩くだけでピクンと肉棒が踊ってしまうのだ。

「他の男で練習してるってことか?」

「そ、そんな訳ないでしょっ!! 本とか……先輩や涼夏ちゃんに聞いたり……」

「私達が好きな人以外とエッチするように見える?」

「どうだろうな。ここの部の女は全員淫乱だからな……」

「酷いっ、こんなに尽くしてるのにつ……!!」

「こんなに好きなのにつ……!!」

「うっ、くあああ……耳に入ってくるっ、両方の耳から、お前らのっ……!!」

左右から突っ込んでくる舌に哀れな法楽が合唱する。小さくて絶対に入らない耳の穴へと、女子が二人して無理矢理に舌先を捻じ込んで来る。グリグリと……じゆるじゆると……舌先の感触と、粘液のへばりつく厭らしいオノマトペが俺をモノラルに襲った。

両方の耳穴を同時に舐められると、まるで全世界が反転したような思考に陥る。聴覚が遮られて脳みそが掻き回される感覚……視界がパチパチと揺らぎ、心臓が飛び跳ねそうになる。ズボンの中でも、ペニスが苦悶に暴れたがっていた。

しかし、それは二人によって叶わない。快楽に叫ぼうと震えたくても、男根はしっかりとズボンの上から捕らわれている。二本の魔手が亀頭を握り、器用にも撫でるように擦り上げていた。

「この勃起だってホントは私達のじゃないんでしょ？」

「そうそう、どうせ他の女子と絡んで興奮したに違いないよ」

「陸上部とかテニス部とか好きですもんね、先生」

「だ、誰だよ、そんなデマを広めてる奴は……」

「失礼だよ、先生。私達が居るのにさ」

「言ってくれれば、私もブルマくらい穿くからね？」

「誰も言っていないだろ、ブルマ好きだなんて」

「はいはい。みんな知ってる話なのに、ムキに否定しちゃって……」

「三沙ちゃん、もう抜いちゃお？」

「うん……」

日登江が言い、ズボンのチャックを開ける。下着の前開きへと手を突っ込んで、慣れた様子でペニスを外界へと引っ張り上げた。

先端は我慢汁が溢れている。苦しそうにピクピクとうねる男根の動きも相まり、まるで赦しを請い、如く泣いているようだった。

「はあ、はあ、はあ……先生の……めっちゃ勃ってる……」

「こんなに元気なら、わ、私にもチャンスあるよね？ セックス……」

「先生……好き……」

その異形を眼にした二人が揃って息を呑む。乳房を両腕にくっ付けているので、二人のドキドキが俺にもダイレクトで伝わってくる。俺のイチモツ……これまで水泳部の女達を虜とさせてきた礎である。いまとっては、この姿を見るだけで女子は強制的に興奮するようになっていた。

三 中野涼夏という女

「こ、こらあ!!　いつまでやってんのさっ!!」

「きやあっ!!」

「うおっ!」

学園で女子を物色の後に、催した股間を部活の女子に処理して貰う……

これがお決まりのパターンである。今日は、たまたま部活動に遅れて更衣室で着替えていた日登江、三沙へと目を付けた次第だ。

スクール水着の状態で両サイドから身体を密着して貰い、俺の好きな耳責めをあらかた堪能すると、いよいよ次は昂ったイチモツの処理であり、Wフェラでも命令しようかと思つた所に、何者かの怒号……もとい邪魔が入った。

意外と身長が高めでスラっと伸びたスタイルに、ネコ目っぽい尖った目付きが特徴的な女子である。正しく、これから事が始まりそうな雰囲気俺らへと目を向けると、顔を真っ赤にしながら、ネコ目を更に釣り上げて我々を威圧してきた。

「先生、部活来るの遅すぎ!! マジで!!」

「悪いな。でも先生も忙しいんだよ」

「嘘つき!! 日登江と三沙も、なにやってんの!!」

「う、ご、ごめん……せつかくのチャンスだと思って、つい……」

「言い訳とか要らんから!!」

当然ながらコイツも水泳部であり、名前を中野涼夏といった。

邪魔という言葉は正しくないだろう。乱入と表現した方が良いかもしれない。

涼夏も二年生であり、二年生ということは『圈内』だからだ。

しかも涼夏と言えば、非常に挑戦的で独占欲の強いと有名だ。

特に、俺のこととなると、こんな感じで見境なく我を失ってしまう。日登江や

三沙は同級生のハズだけど、涼夏を怒らせるのは怖いらしく、目を伏せていた。

「おい、そんなに怒るなよ」

「先生!! 授業終わったら早く部活来てって言ってるのに!!」

「悪かったって」

「そんな空謝りも要らないって!!」

「じゃあ、どうすれば良いんだよ？」

「……そんなの決まってるじゃない」

涼夏は激怒していた。

ただ、怒ってはいるものの、だからどうしたという話である。結局やることは一つしかない。だから、日登江も三沙も、特に慌てたりはしない。怒りながらも、涼夏の手足はしっかり動いている。俺の下へと駆け寄り、大きく開いた股座へとぴったり位置する。眼前に隆々と聳えるソレを手に取りながら、もう怒りなんて無かったかのように官能の吐息を漏らしていた。

「先生、誓せんせ……誓せんせえ……」

何度も俺の名を呼びながら……

ペニスを撫でつつ、紅潮した頬で上目遣いに俺を窺う。目が合うと、またもや名を呟いて温かい吐息を漏らし出す。自分で言う気恥ずかしいのだが、涼夏はとにかく俺にゾッコンなのだ。

それを知る日登江、三沙が呆れ気味に溜息を吐く。とは言え、二人も涼夏ほどじゃないにしろ、俺に気を寄せているコンビである。目を配り合い、苦笑いでも浮かべれば、後は涼夏と一緒にだった。

「じゃあ、三人で。先生も良いでしょ？」

「はあ、こうなるとは思ってたけどさ。たまには三沙と二人で……ううん、私一人……せんせと二人つきりでエッチしたいなあ。ねえ、せんせ？」



「日登江。先生は一人しかないんだよ。そりや私も出来るなら、一人で先生を独り占めしたいけどさ。でも、なにより私は先生を幸せにしたいの。それだけが私の望みだから、こうやって誓先生が感じてくれるだけで私も幸せだよ」

「涼夏……はあ、全くもう。私も先生のことは大好きだけど、なんていうか……とにかく、涼夏ってホントに凄いやね……」

「アタシ誰にも負けないから。誓先生を想う気持ちだけは。絶対に」

「涼夏の気持ち嬉しいよ。ただ、もう爆発寸前だ。なんとかしてくれないか？」

「勿論っ、じゃあ三人で舐めよ？」

「うんっ」

「分かった!!」

恥ずかし気もない涼夏の告白から逃げるように奉仕を促す。両脇に座っていた日登江、三沙が床に下りて今度は涼夏の左右に着く。俺の股座に三人が横並びになった状態だ。

視線の先には、俺の怒張が居る。早くなんとかしろと言わんばかりに、ずっとピクピクとうねりを上げている。その様子に三人が見惚れること一分……すると涼夏が先陣を切って股間を支える。天を仰ぐ男根を少し傾けて……涼夏が蠱惑の舌を伸ばした。

続いて日登江、三沙も舌を伸ばす。三人は、隙間なく頬をくっ付け合いながら、懸命に舌を伸ばしてきた。

こんなに可愛い子が三人も、顔をくっ付けて俺の男根を……亀頭を舐めてくる。上のアングルから観た光景は、正に絶景という他がない。俺はトリプルフェラがなにより好きであり、三人が一つの肉棒にしゃぶり付く様子を脳に焼き付けるが如く快楽を咀嚼していた。

「ぢゅぱっ、れろっ、れろれろっ、すごい……ヒクヒクしてる♥」

日登江が亀頭の片側を集中攻撃する。たまにキスを織り交ぜたりと、いろはを知った動きを見せる。この緩急が堪らないのだ。ただ一直線に舌で撫でるだけの三沙とは違う。俺は三沙を視てやる。

「れろれろれろっ、んっ、れろっ、んっ、はっ、はあっ、んっ、れろっ」

三沙は、日登江より不器用なのだろう。緩急という言葉を知らない。学ばない。ただ単に力任せに亀頭を舐めるだけである。だがまあ、こういう素人臭い動きも嫌いではない。ウチの部は、もう誰もが俺を悦ばせるプロになっている。そんな連中の中に一人混じる素人も、中々味気があって良いかもしれない。肉体関係も、もう一年以上が経ってるのに、未だに羞恥心を抱いてくれるらしく、顔色も真っ赤でウブな感じであり、その必至感が男心を攪られた。

「くあああああつ、い、良いぞ。そのまま、頼む……」

「じゅるるっ、んっ、先生、亀頭がパンパンだよ。もう出るの？」

「恥ずかしがらな」

「別に、れろっ、んっ、なにが恥ずかしいのか分かんないけど、ちゅくっ、んっ、それじゃ、出しちゃって良いよ、このまま……れろっ、れろれろっ……」

既に準備が整った状態で此処に来ているのだ。

そんな中で三人から責められれば、生憎ひとたまりもない。トリプルフェラに慣れ親しんだ動きであり、いまでは同級生と共に一本の肉棒を争う状況に羞恥が無い。最初の頃は、涼夏すら照れ臭そうに何度もはにかんでいたというのに……いまでは直向きに、フェラだけに集中してくれている。あの大人しい三沙でさえ、下手ながらも鼻息を荒くして男根へと傾倒するようになっていた。

ドウピュルルッ、ズプッ、ヌプウッ……

「んくうううっ!? あはっ、せんせ。いっぱい出たね♥」

「ああああ……先生の精子い……涼夏、私にも……♥」

お陰で俺も安定して射精に及べた。

尿道を咥え込んでいた涼夏へと全てぶちまける。口内に注ぎ込み、それを羨む日登江、三沙が自然に精液塗れの涼夏とディープキスをしていた。

四 スクール水着

「んっ、ちゅくっ、ちゅっ、んっ……」

「はふ、先生の精液……苦いんだけど、癖になるんだよね……はあああ……」

「ん……私は好き、この味……」

「舐めてるだけで興奮するよね。なんなんだろうね、これって……」

「フェラして先生の精子を飲んで……はあ、とにかく幸せだよお……」

俺を度外視（？）して悦に浸る三人。同級生……しかも同性とデーパーキスを交わしながら興奮に酔い痴れるとは、一年という歳月の長さを感じる。当時では、恥ずかしさが勝って絶対にキスなんかしなかったのに……

ところで俺抜きに盛り上がってる所を見ると少し寂しい。

「お、おい」

「あ、ごめん。先生。私達だけで盛り上がっちゃって……」

「い、いや、別に寂しくねえし!? 勝手にキスしてろよ」

「妬いてる先生可愛すぎ♥　ね、先生も一緒にキスしょ？」
　　と言い、それまでずっと跪いていた三人が立ち上がる。中腰に屈み、俺の目の前に三人の顔が並ぶ。フェラチオと精液により、三人とも明らかに興奮している。顔が紅潮して瞳も媚薬に蕩けている。そんな顔が三つも、俺を目掛けて舌を伸ばしてきた。

「お前ら、精液でベトベトじゃねえか」

「ちゃんとゴックンしましたよ？　ってか自分の精液じゃないですか」

「それでも嫌なんだよ。嫌なんだけど……まあ良いか……」

「あゝん、先生っ♥」

「大好きっ、んちゅっ、ちゅるっ、んっ……」

「す、好き、です、先生……じゅっ、ちゅくっ……」

三人のエロい顔を見たら断れない。俺が軽く顎を上げた瞬間に、三つの顔面が迫ってくる。舌が伸び、まず最初はと言わんばかりに、俺の顔全体を犬のようにぺろぺろしてきた。

「先生、先生、先生、先生、先生、先生、先生、先生、先生、先生、先生、先生、先生、先生、先生、先生、先生……大好き大好き、大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好きっ!!」

「先生の顔、綺麗にします……!! 私の唾で……ベトベトしてあげます!!」
「じゅぷつ、じゅるるるつ、べちやつ、ぬちやつ、あむつ、ぐちゅつ……」
俺は、女の体液が好きだ。

それも、この一年間で水泳部の全員に知れ渡ってしまっている。だから、俺を悦ばせようと、みんなして俺の顔面へと唾を垂らしてくる。口の中でパンパンに溜まった唾を垂らし、ベトベトになった所を自らの舌で伸ばしていた。

これをキスというのか分からない。仕込んだのは紛れもなく俺だけ……
猛烈な臭いが鼻を刺す。当然だ。三人の唾が顔面で絡んでいるんだから。
だが俺は、こんな臭いも好きだった。

射精で萎え掛けていたペニスに精気が戻る。それを察した涼夏がノーブルックで肉棒を手に取り、キスをしながら器用に扱き始めた。

「せんせえ……もつと精液……欲しいの……」

「相変わらず欲張りだな、涼夏は」

「あ、あの、私も、欲しい、です……」

「三沙も、随分と生意気になったもんだな……」

「私にも頂戴……このあと、なんでもするから……」

触発された日登江と三沙も、一緒に手を伸ばしていた。

「ちよ、ちよっと待て。もう今日は手コキでイク余裕が無いな。どうせお前らは、セックスもしたいんだろ？」

「うん……」

「じゃあ、挿入れさせろ。俺も、お前らを感じたいからな」

「んっ、嬉しい。そういう所が大好きなの……」

「私いますぐセックスしたい……フェラでグチョグチョになったから……」

「そ、それを言ったら私もだよ……ムズムズする……」

「じゃあ、しようがないけどジャンケンだね」

三つの舌が、いったん俺の顔から離れる。名残り惜しい気分を余所に、三人が公平にジャンケンをする。誰が最初に挿入れるかを争っていた。

「へへー、私の勝ち!! ま、順当かな」

「涼夏か。なんかそんな気がしてたよ」

「一番好きだから!!」

「分かったから、早くしろ。夜になっちまうぞ」

「あ、急がないとね……じゃあ、このまま挿入れるね……」

見事に勝ち取ったのは涼夏である。声を高らかに、プール場まで聴こえそうなくらいの音量で歓喜していた。

もう情欲も限界だったらしい。見て明らかな程に、涼夏の股間は濡れていた。スクール水着の股間部分が湿り、試しに触ってみるとクチュツと厭らしい音が響く。湿りは更に広がり、少し動きだけでブチュブチュと音がする。椅子に座る俺へと涼夏が正面から腰を下ろす。いわゆる対面座位の形を取った。

「この形、一番好き♥」

「なんで？」

「だって先生と密着できるじゃん」

「なるほど」

股間はまだ入っていない。俺の股間に座った形であり、ペニスからは、涼夏の重みが伝わってくる。濡れたスクール水着の感触が心地良い。また、涼夏の言う通り、対面座位はゼロ距離で密着が出来る為に、上半身からは水着越しの乳房の感触が味わえる。これもまたオツだった。

「先生と知り合って、もう二年近くだよね？」

「急にどうした？」

「先生に一目惚れしてから、もう二年だよ。なのに、まだ先生に恋してる……」

「二年は引っぱり過ぎじゃないか？」

「本当だって。ほら、未だにドキドキするもん。先生と一緒に居ると……」

と言、涼夏が強く抱きしめてきた。

柔らかい感触の先からは、確かに慌ただしい心音が聴こえた。

コイツが俺を好き過ぎる理由は分からないけど……そこまで想われて悪い気がしない訳がない。俺も、俺のペニスも気分を良くする。ピクンピクンとペニスが跳ねり、涼夏が頷いてスクール水着を少しズラす。ちようどペニスが入るように、股間部分だけズラして……そのまま静かに男根は吸い込まれていった。

「あああああ……ッ!! どれだけやってもっ、この感覚だけはあっ……!!」
そして歓喜。涼夏が天井を仰いで悦に溺れた。

「お前、だからイクの早いって」

「あああああっ、あ、当たり前じゃん、先生とセックスしてるんだからあ♥」

膣がキュウっと締まり、根元に心地良い痛みが走る。膣内は十分に熱しており、入ってきた異物を溶かす勢いで愛液が迸る。尋常では無い大量の愛液が溢れ返り、それは涼夏の絶頂を意味していた。

「いぎい……くあああ、あっ、はあっ……はあ、はあ、はあっ……!!」

陰唇を始め、全身がビクンと痙攣している。言葉も発せない状態になり、俺を抱きしめる力が更に込められる。「んんっ」という苦しそうな呻き声に、それと俺の身体を思いつき噛んでくる……これぞ涼夏だった。

「おい、首を噛むなって」

「ご、ごめ……だって、気持ち良すぎだから……」

「それで、なんで毎回噛んでくるのか分からんが普通に痛いぞ」

「ごめ、ごめん……気持ち良すぎてっ、んんんっ!!」

「謝りながら、まだ噛んでるんですが……」

「はあ、はあ、んっ……あああああっ……」

少しずつ呼吸を整えている。これまで涼夏とは百回はセックスしてるハズだが、飽きもせず苦しそうに、ゆっくりと動き出す。俺の方からは特に腰を突き出さず、涼夏のペースに合わせていく。涼夏が軽く腰を持ち上げ、そして落とす。激しい動きは一切無いのに、それでも涼夏の絶頂は続いた。

「あああああっ、はあああああっ!!」

「お前イキ過ぎだろ。いつになったら俺のチ○コに慣れるんだよ」

「せ、先生の、お、大きすぎるんだよっ……あああああっ、くうううっ、少し動くだけで、イ、イツちやうっ……!!」

俺を抱きしめる両手・両指が震えている。まるで事切れる寸前のような様子だ。そんな姿を見るとイジリたくなるのが俺である。少しずつ快樂を得たい涼夏に對して俺は、いきなり腰を突き上げて見せた。

「ひやあああああああつ!! な、なんで動くのおおおおつ!!」

「もつと気持ち良くなる為に決まってるんだろ」

「ま、待っ……もつと、ゆっくりっ、あああああつ!!」

「あんまり時間を掛けたくないからな。おら、どんどん行くぜ!!」

「あああああああああああああああつ!!」

パスン、パスンツ!!

腰を叩き込む乾いた音と、クチャツクチャツという粘液の混じる音が響き渡る。あまりの刺激に、涼夏の唇が首筋から離れる。俺に噛み付く行為が好きらしいが、そうも出来ないくらいの快感を与えてやる。デカ過ぎるらしいペニスで突きあげ、スーイトスポットを抉るような力任せのセックスを叩き込んだ。

「あああああつ、あああああつ、あああああつ!!」

挿入だけでアクメに達する涼夏。こうして突きあげを繰り返すだけでも絶頂に達するくらい敏感なのだ。オーガズムを繰り返し、再び人語を失う涼夏。またも天井を見上げて鳴いている。更に、目をグルンと反転させて、だらしなく開いた口からは涎が漏れていた。

あまりの快楽に理性が剥がれている……そんな様子だった。

「涼夏の、快感に溺れてる姿、好きだぞ」

「あへえええ、あはっ、ひいつ、んっ、あ、あり、ありが……ふあああっ!!」
俺も、気を失いかけるくらいの快楽を味わってみたい……と、思いながら……
そこに、憧れを抱きながら……何度も何度も涼夏を突いた。
その恩恵を少しでも預かりたい気持ちで……

「せ、先生……」

「わ、私達も入って良いですか？ 涼夏ちゃん見てたら、私達も、もう……」
と、狂楽の涼夏を間近で窺っていた二人が、おずおずといった風に出てくる。

股間を抑えながら、紅潮した顔を隠そうともせず……

これも、いつものパターンと言える。場が盛り上がってくると、周りの女子が
挙って混ざりたがる。当然ながら、乱交は大歓迎だった。

「日登江、三沙。お前らも入れよ」

「うん……」

「じゃあ、ここ、かな……?」

「……お前らしいな」

蟹股で対面座位をしている。二人は、180度近く開いた両足へと座ってきた。
もちろん、俺の脚である。股間には涼夏が位置しており、右足に三沙、左足に
日登江が座る形となった。

ずっしりと重みを感じる。当然だ。下半身に女子が三人も乗っているのだから。

「私これ好き……」

「私も。ちよつと恥ずかしいけど……」

「んっ、ふふっ……濡れてるの先生に伝わって恥ずかしい……」

「恥ずかしいけど……んっ、気持ち良い……!!」

左の太腿に座る日登江が、陰部を宛がった状態で前後に動き出す。同じくしてゆつくりと三沙も動き始めた。

「はあっ、はあっ、せんせえ……濡れてるの分かる？ 太腿、愛液で綺麗にしてあげるね……はあ、んっ、あああああっ、はあっ、はあ、はあっ……!!」

「先生の足に股間……擦り付けて……エッチだよ……でも、止まらないの……」
左右の太腿にスクール水着が走る。擦ったいような独特の触感に、全身の毛が逆立つ。ただ股間を擦り付けるだけなのに、日登江と三沙も身悶えしていた。

愛液に塗れたスクール水着の上から陰部を擦り付ける……その快感を知るのは、恐らく水泳部だけだろう。スクール水着の素材に、快楽液がローションとなって擦れ合う……僅かに感じる女子の陰毛の感触。ソープランドの【タワシ洗い】に相当する行為であるものの、スクール水着の独特な感触が一線を画す。こんなの、エロい水泳部の顧問でしか味わえない贅沢な快楽だった。

五 アクメ三昧

「せ、せんせ……はっ、はっ、はあっ、キ、キスしてっ、んっ、んちゅうっ!!」

「涼夏。んっ、はあっ、お前ただけイケば気が済むんだよ。底なしだな……」

「先生が満足するまでっ、わ、私も止まらないからっ、せ、先生の為なら、なん、なんでもする……肉便器になるっ、ただだけ愛人居ても、私は先生だからなのっ、一生、尽くすからあっ!!」

「挿入してキスして胸で擦り付けてきてっ、し、仕込んだ甲斐があったぜ……」

「あっ、はあっ、はあっ、んふううっ、先生いつも、涼夏ばかり……わ、私のことも、み、みてよ……こんなに愛液出てるんだから、気付いてよ……」

「日登江、ちゃんと気付いてるよ。お前の剛毛っぷりにな。スク水越しのタワシ洗いも最高だ。愛液でヌルヌルしてるし、しかも毛深いから気持ち良いぞ……」

「うう、毛深いから良いって……いつも言ってくれるけど恥ずかしいよ。先生がそう言うから剃毛も出来ないし。うううう、毛深いの恥ずかしい……」

「良いじゃん、日登江。私なんか毛が殆んど無いから……」

「まあ、それはそれで三沙の擦りも気持ち良いよ」

「ああ、嬉しい。幸せ……♥」

「ま、負けられない、私もっ……!!」

「先生っ、だい、すき……んっ、ふああああっ、ま、またイツちやうっ……」

股座から感じる三人の愛壺。涼夏の膣内に、日登江と三沙によるタワシ洗いが俺の快楽を助長する。日登江と三沙は、股間を擦り付ける快楽だけに飽き足らず、自らの指でも陰核や乳頭を摩擦していた。

俺への愛を漏らしながら、涼夏も、日登江も、三沙もオーガズムを嗜んでいた。こういう時は、いつも男の俺だけが残されたような気分になる。俺も再びアクメに達するべきと、ピストンの速度を上げていく。涼夏を強く抱き、キスで愉悦を高めながら、臀部を突き上げた。

「涼夏っ、も、もう出すぞ……」

「はああっ、はあ、はあっ、先生の硬くなってる……こ、このまま出しちゃって、お願い、お、奥っ、当たってるっ!! 子宮……痒いトコ……も、もつと、思いつ切り叩いてっ!! 子宮に、注いでえっ!!」

「言われるまでないっ、はあ、はあ、はあっ!!」

キスをしながらの、激しい上下運動である。多少の酸欠すら心地良くなる程に、アクメが顔を出していた。

ただ、二度目の射精は、一度目に比べて慢性的だ。

顔を出してから射精までの時間が長い。この、ジワジワと押し寄せてくる波が麻薬となって脳を支配する。もはやゴールまで只管にピストン運動をするのみだ。俺の動きも荒くなり、自然と中腰になる。涼夏へのキスも、気付けばさっきのように唾液で顔面を汚すだけになっている。もちろん、涼夏はそんなことを気にしない。俺の絶頂を手伝い、延々と愛を叫んでいた。

「先生、大好きっ!! 大好き大好き大好き大好き大好き大好き!!」

「涼夏、涼夏、涼夏、涼夏、涼夏っ!!」

涼夏は、自分の想いを何度でも言葉にしたいタイプらしい。

まるで、その言葉しか知らないかのように、何度も何度も「好き」を繰り返す。俺もまた、涼夏の名前を連呼していた。

「涼夏も先生も凄い。わ、私も先生のこと、好きなんだから。好き、好きっ!!」

「あ、う……好き、です。先生……好き、好き、好き……はあ、はあ、はあ」

最後には、日登江と三沙も参加する。四人の想いが一つになり、俺は多幸感を形として涼夏の膣内へと吐き出すのだった。

ヌプツ、ドプツ、ジュプウツ……

無遠慮に膣内へと放出する。涼夏を抱く腕に力が籠る。スクール水着の感触を全身で感じながら、涼夏のデーパーキスで顔面をベトベトに塗れながら……俺はありったけの精液を中に注いだ。

「はあ、はあ、はあ……」

何度も脈打つ。慢性的だった快楽が、一瞬にして弾けた。

手足が硬直して意識全体が亀頭に向かってるような感覚……

俺も暫く動けず、最後の一滴まで涼夏に注ぎ込んだ。

「う、あ、あ……ふあああ……」

肉壺で俺の灼熱を味わい、涼夏の筋肉が硬直する。事後硬直というべきか……火傷したように身体をビクンと跳ねさせながら、まるで精液の味を胎内で嗜んでいた。

「あああああ、身体の奥が熱くてジンジンするよお……」

「すまん。また中に出しちゃった」

「えへへ、なんで謝るの。嬉しいに決まってるじゃん」

「気持ち良かったか？」

「最高だった。幸せ過ぎて、死んじゃうかと思った……」

相当に気持ち良かったらしい。涙目の涼夏が感謝の言葉に加えてキスをくれる。膣内が精液に満ちると、自然にペニスが剥がれ落ちる。射精の直後にも拘わらず、未だ男根は力強くそそり、俺と涼夏の下腹部に挟まれる形となる。

「ふあ……♡」

より強く涼夏を抱き締め、精液と愛液で汚れたペニスをスクミズに擦り付ける。射精で感度が増した亀頭でグリグリと宛がう。腹部に感じる亀頭の熱に、涼夏が再び愉悦の声を漏らした。

「んっ、ふうっ、せ、せんせ、これ好きだよね。擦り付けるの……」

スクール水着の感触が好きなのだ。

もう少し、このまま擦り付けよう。余韻までも存分に楽しもう……と、思うも、不意に何者かによって俺と涼夏の身体が引っぺがされた。

「なにすんだよ、日登江、三沙」

俺の両足をスクミズで磨いてくれていた二人である。俺と涼夏が二人の世界に酔い痴れる中でも、懸命に俺へと献身を続けていた日登江と三沙だ。

お決まりのようにムスツとした顔で軽く俺を睨んでいた。

「なに、って……お掃除してほしいでしょ？」

「射精したらみんなでフェラをする……先生に、そう教えられましたからね」

「とか言って、ただ俺に構って貰いたいだけだろ」

「な、なに言ってるのっ!! 私達を蔑ろにして涼夏と二人で愛し合ってただけで妬くわけないじゃんっ!! バカ!! バカ先生!!」

日登江が真っ赤になって怒る。三沙も、口にはしないけど同調していた。

「ふん。じゃあ、舐めろよ。舐めたいんだろ?」

「せ、先生がそう教えたから、舐めるだけだし……」

「……い、頂きます」

「涼夏に中出しして、それからのダブルフェラは最高だな」

「じゅるるっ、れろれろれろっ、んっ、れろっ……」

「ぢゅるっ、ぺろっ、先生は……やっぱり涼夏の方が、その、好きなの?」

「俺は先生だぞ。誰か一人を贖するなんてしないから安心しろ」

「ウソ付き……」

「……いいからフェラに集中しろ」

水泳部は一人残らず、俺に依存しきっている。

男を知らない箱庭娘が、俺という邪悪に一年間も染められてしまったから……

依存されるだけなら構わないけど、加えて独占欲まであるからタチが悪いのだ。

主従関係をハッキリさせなかった俺の所為でもあるのだが……

「ん……お掃除、私もする……」

それまでグツタリしていた涼夏が、半分寝惚けたような声で起き上がる。んで、日登江と三沙に割って入り、ダブルフェラはトリプルフェラに、相変わらず休む間もなくペニスが女子達によって絡め捕られていった。

射精後にフェラ……とことん俺に準ずるよう、この手順を教えたのも俺である。精液を放ち、汚れた亀頭を当たり前のように舌で掃除してくれる。厭らしい音を立てながら……

「う、くうっ……ありがとな。今日も、良かったぞ」

俺は、若いだけで絶倫とはいえない。二度、三度も射精をしたら満足に至ってしまう。ペニスの耐久性ってのは、回数を重ねるだけでは増してくれないのだ。

よって俺は、このトリプルフェラにて閉幕を想察させる献辞を送った。

「ちゅぱっ、んっ、もう終わり、かあ……」

「せんせがもうちよつと若ければ、ちゃんと全員にも手が回るのになあ」

「俺はまだ若い」

「じゃあ、私達にもセックスして下さいよお……♡」

「いや、もう疲れたから……」

「……おじさん」

「まだ若者だつてば。昼間もエッチした上で二回も出したんだぞ。普通の奴なら、こんな生活は毎日でも出来ないって。いやマジで」

「ふん」

俺の耐久性を疑う女達。全盛期こと去年に比べると半数近くが減ったとは言え、それでも二十人の愛人を囲っている。人数が多い所為で、一日に最低でも十回は射精させられているのだ。

そんな生活を毎日……

去年は、もっと酷かった……

男を知らない箱娘には、所詮俺の凄さなんて分からないのである。

「……それより、言い訳を考えないとな。更衣室でエッチしてた理由をよ」

「やっぱ、みんなにもバレてるよね」

「あんなに声を出してりやな」

「ぢゆるっ、んっ、ちゅぱっ、部長に、めっちゃ怒られるんだろうなあ……」

「大会が近いから、部活中のエッチは厳禁って言ってるのにね」

「なんか考えるだけで病んじやう……」

「俺も、厳重注意を受けたっけか」

「そうだよ。ってか先生が一番怒られるべきだよね」

「でも、部長は先生に甘いから……」

「不公平だよ……」

三年で水泳部の部長でもある豊島美波は、蚊も殺しそうにない見た目に反して規律に厳しい。大会が目前ということもあり、実は性行為について自粛するように厳しく注意されていた。

「はあ………」

昼休みは当然のこと、部活動の最中なんて以ての外である。なのに、部活動が終わる頃まではっちやけていたなんて大目玉もいい所だ。

楽しい行為が終わり、漸くと理性が戻ってきた三人は、ただただ美波の怒りを恐れるばかりだった。